

《論 文》

宗教教育としての病院ボランティア教育の可能性

才 藤 千 津 子

I. はじめに

人を思いやることができる人間性を養うために、大学教育でできることは何なのだろうか？ 宗教についての知識や形式を単に教え込む教育ではなく、学生たちを生き生きとした関係性へと引き込むことができる宗教教育の方法はないのだろうか？

教育と霊性(スピリチュアリティ)の関係についてさまざまな発言をしているアメリカの教育研究家パーカー・パーマーは、今日では、あらゆる教育現場が権威主義と闘争、そして孤独と分断の痛みの中にあると指摘する。そして彼は、キリスト教を始めとした宗教的な伝統のなかに、そのような痛みのただ中で希望を見出す道を探ることを提言する。彼は、宗教的な伝統に立った教育のなかには、愛と共感の力によって「共同性」と「関係性」を回復してゆく指針があると言う(パーマー、2008)。

聖書に深い思いやりを表現するギリシャ語「スプラクニゾマイ(σπλαγχνίζομαι)」という言葉が出てくる。新共同訳聖書では「憐れに思う」と訳されているこの言葉は、共観福音書のなかの、イエスの行動やイエスが語ったたとえ話のうちの12カ所だけに使われている。たとえば、マタイによる福音書9章36節には、イエスの様子を描いて「また、群衆が飼い主のいない羊のように弱り果て、打ちひしがれているのを見て、深く憐れまれた。」(新共同訳)とある。

また、隣人とは誰のことかというユダヤ教の律法の専門家からの問いに答えてイエスが語った「善いサマリア人」というたとえ話の中にも「憐れに思い」という言葉が使われている。

イエスはお答えになった。「ある人がエルサレムからエリコへ下って行く途中、追いはぎに襲われた。追いはぎはその人の服をはぎ取り、殴りつけ、半殺しにしたまま立ち去った。ある祭司がたまたまその道を下って来たが、その人を見ると、道の向こう側を通って行った。同じように、レビ人もその場所にやって来たが、その人を見ると、道の向こう側を通って行った。ところが、旅をしていたあるサマリア人は、そばに来ると、その人を見て憐れに思い、近寄って傷に油とぶどう酒を注ぎ、包帯をして、自分のろばに乗せ、宿屋に連れて行って介抱した。そして、翌日になると、デナリオン銀貨二枚を取り出し、宿屋の主人に渡して言った。『この人を介抱してください。費用がもっとかかったら、帰りがけに払います。』さて、あなたはこの三人の中で、だれが追いはぎに襲われた人の隣人になったと思うか。」律法の専門家は言った。「その人を助けた人です。」そこで、イエスは言われた。「行って、あなたも同じようにしなさい。」(新共同訳聖書、ルカによる福音書10章25-37節)

かつて北イスラエル王国の首都であったサマリアでは、紀元前8世紀にアッシリアに滅ぼされて以来、ユダヤ教と異教との混合が進んだ。その結果、イエスの時代には、ユダヤ人はサマリア人を外国人と交わる不浄な人々だと見なしていた。彼らは互いに敵対しており、交際しなかったのである。

だから、このたとえ話に出てくるサマリア人は、倒れているユダヤ人を見捨てて去ることもできたであろう。しかしこのサマリア人は「その人を見て憐れに思い」、立場の違いを越え、自分の金銭を出してまで彼を助けた。一方、律法に忠実であろうとした祭司やレビ人(下級祭司)らユダヤ教の宗教者は、道の向こう側を通って行った。彼らはけが人に関わろうとはしなかったのである。血や死人に触れれば一定期間「身が汚れる」(レビ記21章1節、民数記19章11節)結果、祭司としての務めができなくなることを恐れて、血を流した瀕死の人には関わり合いたくなかったのかもしれない。

ここで「憐れに思い」と訳されている言葉は、聖書の原語であるギリシャ語では「スプラクニゾマイ」である。「スプラクニゾマイ」は、古いギリシャ語では「内臓」「はらわた」を意味した「スプラクナ」という語から派生したことばである。当時、内臓は感情の宿るところと考えられており、そこは人間のもっとも深く激しい衝動が起こる場所であった。「スプラクニゾマイ」は、そこから人が力強く揺り動かされる様子を表現したものであり、「断腸の思い」とか「はらわたを突き動かされて」あるいは「内臓を引き絞られるような思いになって」という意味である。実際、新約聖書翻訳委員会訳『新約聖書』では、同じ箇所「その人を見て憐れに思い」は、「〔彼のあり様を見て〕腸(はらわた)のちぎれる思いに駆られた。」と翻訳されている。また、「その人を助けた人です。」という律法の専門家の言葉は、「彼に憐れみ〔の業〕を行った者です。」と訳されている。

先ほどのたとえ話でサマリア人が旅人を助けたのは、傷ついて倒れている人、苦しんでうめいている人を見て、腹の底から彼の痛みにも共感する気持ちがあふれ出たからである。そして、わざわざ自らの時間と金銭を投じて、敵ともいえる人を助けるという行動に出たのであった。サマリア人は旅人の傷の手当をし、宿屋に連れてゆき、滞在費用を支払ってやるが、彼はそのとき民族や宗教などの「境界」を越えて、自分たち同胞のもつ価値の枠組を超えて、自分にできるせいっぱいのことをした。そして、そのことによって彼は、瀕死のユダヤ人の「隣人」になったのだといえる。

イエスは、愛する対象を特定の国民的、宗派的グループに限定すること、つまり、人間関係に境界を設けようとする試みを批判した。あなたも、このサマリア人のように、自然にあふれ来る愛と憐れみに情熱的に動かされて心の底からの愛の行為を行いなさいと言ったイエスの勇氣ある教えは、当時の社会で正しいとされた「ルール」「掟」への挑戦であった。

ここでイエスが教えようとしたことは、隣人への愛は、人格と人格の生きた出会いの中で「共に苦しむ」なかで成立するもの、そして民族や宗教など人間が設けたさまざまな境界や枠組みを乗り越えてゆくものなことだったのではないだろうか。

ルカによる福音書6章36節で「あなた方の父が憐れみ深いように、あなたがたも憐れみ深い者となりなさい」と人々に勧めたイエスは、人々の苦悩を深く感じ取ることができる、コン

(共に)パッション(苦しみ, 情熱)の人であった。牧会神学者ヘンリー・ナウエン(ノーエン)はこれを、「イエスがあわれみに動かされる時、かれの存在すべてが神の愛とひとつになり、すべての命の源が揺り動かされ、神の限りないやさしさが姿を現す」(ノーエン他, 1994, p.26)と表現する。イエスは人々の傷に近づき、病気や血や死を「けがれ」とする当時の社会の考え方に逆らい、病んだ人々に直接手を触れて助けた。そしてそんなときイエスの周りでは多くの癒しの奇跡が起こった。イエスを深く動かしたのは、貧しさや病気、社会からの偏見や差別に苦しんでいる人々に対する情熱的なまでの共感であった。イエスの真の福音とは、人間から遠く離れた神ではなく「恐れられ、敬遠される神でもなければ復讐の神でもなく、わたしたちの苦痛に心を動かされ、しかも人間の苦闘に全面的にかかわられる神」(ノーエン他, 1994, p.30)を指し示すことにあったといえよう。

本稿では、新約聖書の福音書のなかの「憐れに思う」という表現についてパーカー・パーマーやヘンリー・ナウエンを参照しながら考察する。また、生涯をハンセン病の看護に尽くした井深八重の生涯を理解する鍵として「ちむぐりさ」という言葉を紹介し、筆者が同志社女子大学の学生たちと行ってきた病院ボランティア活動プログラムの宗教教育としての可能性を探りたい。

Ⅱ. 井深八重の生涯と「ちむぐりさ」

同志社女子部の卒業生で日本のナイチンゲールと呼ばれた井深八重(1897-1989年)は、生涯をハンセン病患者の看護につくした女性として有名である。彼女は、新島の妻となった山本八重と同じく会津にそのルーツを持つ。もと会津藩士であった井深家の出身で、父方の祖父は会津藩藩校・日新館の学頭(校長)でもあった。当時中国語通訳として活躍していた父井深彦三郎が仕事で滞在していた台湾で生まれ、13歳で同志社女学校普通部に入学、その後専門学部英文科に進み、少女時代・青春時代の8年間を同志社女子部の寮で過ごした。そして、のちに看護婦になり、生涯をハンセン病患者の看護につくした。

井深八重は、1961年には、国際赤十字よりフローレンス・ナイチンゲール記賞を受賞、1975年、同志社大学より名誉文化博士号を授与され、同年にはアメリカの週刊誌「タイム」(125号)に「マザーテレサに続く日本の天使」と紹介されるなど、数々の栄誉を得た。しかし、彼女の前半生は厳しい試練に満ちたものであった。井深井深の両親は八重がわずか七歳のときに協議離婚しており、母テイとは生き別れて、八重は父方の祖母に厳しく育てられた。父とは、母と別れてからはいっしょに生活していないようである。母に会いたい、寂しいと思いながら、八重は結局、別れて以来死ぬまで一度も母に会えていない。

ところで、井深八重が在学していた時代から現在まで同志社女子部で行われてきた宗教教育には、聖書やキリスト教の講義の他に、毎日の礼拝(祈り、賛美歌を歌う)がある。寮生活をしてきた八重もそのような宗教的環境の中で家族的な人間関係を体験し、すなおな信仰の芽を育てていったようである。八重はのちに同志社での寮生活についてこう書いている。

…寮の規則の一つとして毎朝六時半起床について七時の朝食前に鐘が鳴りますと『おしづ

かの時間』といって朝食前の十五分間はお互いに沈黙を守り、聖書とか修養書を読んだり、祈り考えたり、又一日の計画をたてるなど、内容は自由でしたがこのような習慣はいつとはなしに身につけていて何かにつけプラスになっておりました。…(井深, 1982)。

昭和50年(八重78歳)同志社創立百周年を記念して、名誉文化博士号を受賞したときの寄稿文で、八重は、同志社での8年間で学んだ「眼に見えないたまもの」は、「目に見えるものより見えない価値、外面よりも内面の生活に対する深い関心であった」と言っている。

同志社を卒業後、井深八重は長崎で高等女学校の英語教師になった。ところが、22歳のとき、皮膚の痛みやかゆみを感じて病院に行ったところ、ハンセン病の疑いがあると診断されたのである。ところが本人には詳しい事実が知らされず、親族会議の結果、静岡県御殿場のハンセン病の療養所「神山復生病院」に連れて行かれた。この病院は、1899(明治22)年にフランスからやってきたバリ外国宣教師会のカトリック神父テストウィード師によって設立された、日本で最初のハンセン病療養所として有名である。

当時ハンセン病は「ライ病」と呼ばれており、治療の方法がない「不治の病」だと思われていた。症状が進むと手足や顔が変形する後遺症が残るために、社会からの偏見や差別の対象になっていたのである。また遺伝病だと思われて恐れられてもいた。現在は、ハンセン病は感染力の弱い病気だということがわかり、よく効く薬ができています。しかし、当時はハンセン病にかかっているとわかったときには、一生を病気の苦しみだけではなく、人々の差別と社会からの排除のうちに暮らさなければならなかった。八重も、病院では親族に迷惑が及ぶことを避け、過去の生活を一切断ち切るという当時の慣例に従って、名前を「堀清子」という名前に変えている。

60年後82歳になった八重は、当時を回想してこう書いている。

私が、こちら(御殿場の病院)に参りましたのは、大正8年の夏、丁度、ドルワル・ド・レゼー師が五代目院長として就任されてから二年目の夏でした。何処へ行くとも教えられぬままに着いたところは、何となく、薄気味のわるいこれが人の住家なのだろうかと思われるような、木立に囲まれた灰色の建物がたち並ぶ一角でした。やがて木立の間をゆくと、一軒の洋館があって、通されたのは院長室でした。黒のスータン(カトリック司祭の祭服)に白髪温顔の外人は、初めて見るカトリックの司祭でした。『私が院長です』と挨拶され、付添いの叔父伯母との会話の中から、ここがらの病院であること、そして私が何の為にここにつれて来られたかを、初めて知った時の私の衝撃！それは、到底何をもって、表現することは出来ません。

(中略)きのうまで住みなれた生活環境とは余りにも隔たりのある現状に、私は、悲痛な驚きと恐怖に怯(おび)える毎日でした(井深, 1979)。

先程述べたように、両親の離婚によって親も兄弟も身近になかった井深八重は、このときに、ただ親戚の人々の指示に従うほかなかった。若い彼女にとって、想像もできないような大きな

人生の危機であったに違いない。彼女はこのときのことを、「それは何にたとえようもなく、何か底知れぬ深みへつき落とされた思いでした。『この自分が』と思った瞬間、茫然(ほうぜん)として足の支えを失い、果てしない空間の中へ落ち込んでゆく思いでした。」(井深, 1978, p.78)と述懐している。のちに八重は、このとき「一生の間に流す涙を流し尽くした」(同上)と述べている。

ところが、1年間療養所で過ごしたが、症状が悪化しない、もしかしたらハンセン病ではないのではないかということになり、東京で精密検査を受けた結果、実は彼女はハンセン病ではないことが証明された。このとき、レゼー神父も親戚の人々も、八重に病院を出てゆくように勧めた。神父は、もし彼女が望むならとフランス渡航の道すら紹介しようとしたようである。しかし、八重は、ハンセン病かもしれないという疑いの中、同じ病院で1年間ともに暮らした病院の患者たちの深い苦悩を自らも同じように経験した。そして、苦悩の中で、どのように生きるのが本当に神から示された生き方なのか、ということを実際に考えるようになっていた。

当時はハンセン病の特効薬はまだなく、患部の包帯を交換するのが大変であった。「患者の顔に、手、足に巻かれた包帯をほどいていくと、青いウミや血のまじった赤いウミがべっとりつき、カサブタがこびりついて、なかなかはがせない傷口。患部に軟膏を塗って、洗濯した替えの包帯を巻いてやる。1人の患者に30分、40分かかることもあった」(川嶋, 1991, p.58)というような状態だったと記している人がいる。そんな患者たちのために献身的に働くドルワル・ド・レゼー神父のことを、彼女はのちにこう書いている。

…同胞でさえ、親兄弟でさえ、捨ててかえりみないこのような病者のために、地位も名誉も学問、財宝などすべてを捨てて、この子等の為には如何なる苦難もいとわぬ迄に捧げ尽くされた宣教師達、そして今、眼の当たりに見るドルワル(・レゼー)院長の人柄に私はすっかりうたれてしまいました。

(中略)何の取り得もない自分ではあっても、何か出来ることをしてすべての日本人に代って、これらの大恩(だいおん)にはご恩返しをしなければならぬと、前後を顧みずただこの一念に燃えたちました。(下線才藤)もし許されるなら、このお年を召された院長のお手伝いをして病院のために働くことが出来れば本望であると、心の中に考えておりました(井深, 1979, pp.38-39)。

そして八重は、自分もまた、レゼー神父とともに、同じ病院で、ハンセン病で苦しんでいる人々とともに生きるという人生を選んだ。カトリックの洗礼を受け、東京で看護婦の資格をとって神山生病院に戻り、そのまま一生をハンセン病の患者のために捧げる決意をしたのである。

しかしそれにしても、なぜ八重がこのとき、自らの人生をハンセン病に捧げたいという「一念に燃立ち」(井深, 1979, p.38)、このような世間の常識を越えた激しい決断ができたのだろうか。何が八重の魂をそれほどまでに強く情熱的に衝き動かしたのだろうか。

井深八重に実際に会ってその生き方に大きな影響を受け、自ら社会福祉の道に入ったと語っている阿部志郎は、それを沖縄の古い方言「ちむぐりさ」という言葉で説明している(阿部

2004, pp.62-64)。「ちむぐりさ」とは、直訳すると「肝が苦しい」「肝が痛い」「内臓が痛い」という意味で、誰かが苦しんでいるときにその人の痛みを自分の痛みとして、「自分も痛みを相手と共に感じるような」気持ちを表現する言葉だという。これは福音書のなかに出てくる「スプラUNKニゾマイ」と同じような意味をもつ言葉ではないだろうか。

井深八重は寡黙で自分について多くを語らなかった人である。しかし、先に引用した彼女の言葉にある「何の取り得もない自分ではあっても、何か出来ることをして…(レゼー神父に)ご恩返しをしなければならぬと、前後を顧みずただこの一念に燃えたちました」という八重にしては珍しい情熱的な言葉のなかに、ハンセン病という病気への恐れと向き合い苦しむなかで、患者たちそして異国の地で患者を救おうとして苦闘していた神父たちに激しく揺り動かされ、肝が痛むほどに深く共感した彼女の姿が浮かぶ。その後彼女は、自分の人生への執着を手放して、神からの使命に自らを明け渡した。彼女の人生を大きく変えた決断の背後には、「ちむぐりさ」あるいは「スプラUNKニゾマイ」という体験があったのではないだろうか。阿部四郎は八重との出会いについて以下のように述べている。

愛とは、他者への働きかけを通して、自己の実存が他者によって支えられ、自己と他者が共に生きる「交わり」を指すのではないか。

内から沸き起る深い歓びと希望に包まれた看護婦の美しい輝きと、いきいきと躍動する愛の業(わざ)とが織りなす見事な均衡と調和が、私を交わりへと招き、私の存在をゆすぶったように思えてならない。私も、この看護婦のように生きたいと(阿部, 1996)。

Ⅲ. 病院ボランティアの活動を通して—「無力さ」への気づき

ここ数年筆者は、小児がん医療の全国の拠点のひとつである大学病院の小児医療センターで、医師や看護師、病棟保育士、院内学級の教員の方々の協力を得ながら、大学生ための集中的ボランティア活動とボランティア教育プログラムを実施してきた。この章では、大学生への宗教教育としての病院ボランティア活動の実践を紹介したい。

この活動では、2009年から2017年までに合計9回の集中的ボランティア活動プログラムを実施し、のべ60人の学生と卒業生が参加した。学生は主に現代社会学部社会システム学科の学生であるが、看護学部や学芸学部の学生も参加している。朝から夕方まで5日間のプログラムで、最初の2日間は病院の小児病棟でボランティアとして働くためのトレーニングをし、残りの3日間で実際に病院のプレイルームで子どもたちと遊び、また音楽活動をする。病院での活動後、京都に帰って来てからは、入院患児やご家族に読んでもらうために、病気の検査等を子どもにもわかるように説明した絵本などを作って病棟に寄付したが、これらの絵本は治療の中で実際に医療スタッフによって利用されている。

小児がんは、子どもに生じる悪性腫瘍の総称で、発生頻度は15歳未満の小児人口1万人あたり約1人(全国で年間2000-3000人)である。1960年代まで、小児がんは文字通り「不治の病」であったが、その後のめざましい医療の進歩により、今日では、小児がんの子どもたちの

70-80%が治癒し、成人するようになっている。そのようななか、小児がん医療においては、長期の入院生活が患児とご家族に及ぼす影響の大きさを考え、医療チームが多角的な支援体制を作って全人的ケアを提供することが大事だということが強調されてきている。また、闘病生活で大きなストレスを経験する子どもたちのために、病院の外から新鮮な風を運んで来てくれるボランティアの働きが大切だと考えられている。

この活動の目的は、

- (1) 学生が、事前学習、ボランティア活動を通じて、入院中の子どもたちとご家族を支援し、自分たちも病院ボランティアとしての自覚と責任をもつことを学ぶこと
- (2) 活動を通じて、入院中の子どもたちやご家族、ひいては小児医療センターの医療活動への支援をすることである。

本活動の特色は、毎日仲間と体験を分かち合い、振り返りの記録をつけることを大変大切にしていることである。仲間や教員、医師や病棟保育士など医療スタッフとのやりとりを通じて、自分を見つめ、愛を持って人と関わるとはどういうことかを人間関係を通じて学ぶ。以下、彼らの活動記録の中から、彼らの言葉を紹介しながら、彼らの体験について考察したい。

東北大震災以来、「絆」や「つながり」の大切さがあちらこちらで強調されてきた。本活動に参加した学生たちの多くも、「人のために何か役に立ちたい」「絆を深めたい」という素朴な思いを持って活動に関わった。

しかし、彼らが最初に病院の現場で経験したことは、そのような素朴な思いが打ち碎かれることであった。先端医療を提供する大学病院の現場に入ったとたん、どう動いたらよいかさえわからない。ボランティアどころではなく「何もできない」「無力な」自分の姿と、そこで感じる不安と恐れとに直面する。そびえ立つ10階建ての大きな病院の建物を目の前にし、白衣を着た医師や看護師、車いすの患者さんたちが通り過ぎる病院の廊下を緊張して歩く。病棟では、圧倒的な苦しみ、命の危機と戦っている子どもたちを前にして、ここは自分たちなど「入り込めない」「怖い場所」だと言った学生もいた。「子どもとどう話していいかわからなかった。」「勇気が出なかった。」「子どもたちが点滴を付けていたのは私にとって驚きで、動き回る子どもにどう対応していいのかわからず不安だった。」などという感想もあった。

しかし、以上のような恐れや不安の中から、今まで経験したことのない新たな自分の気持ちや新しい気づきをもった学生もいた。あるとき、自分では全く意識していなかったちょっとした行動を仲間からほめられたある学生は、「自己嫌悪に陥っている私はやさしい言葉をかけられて涙が出そうだった。」と書き、そして、もしかしたら「私たちは何か大きなことを成し遂げなければならないと思いきりすぎているのかもしれない。」と書いた。「新しい考え方に触れ、自分を理解しようとすることで、新しい自分に出会えた気がした。」という小さな変化も経験した。

初めに述べたパーカー・パーマーは、教えるとは、私たちが真実を探求できるような開かれた学びの空間を創り出すことだと言う(パーマー, 2008, pp.141-143)。彼は、学びの空間の重要な特質のひとつとして「受容」、すなわち「開かれた心と気遣いをもって、お互いを、またそれ

その努力や思いつきを受けとめるということ」(同上, p.149)をあげる。受容があるところでは、人は、本当に相互主体的にかかわりあえると感じる。そして、この中でなら、「変わらなければならない自分」という課題を苦しくても引き受けてみようと思えるのだという(同上)。まさに、彼の言葉どおり、この活動の中でも、参加者の学生たちがくり返し、くり返し、自分たちの経験を話し合い、不安な気持ちを聴き合い、互いに支え合ってゆくこと、そしてそれが可能になる「安全な空間」を作り出すことを何よりも大切にしてきた。

学生たちが残した毎日の記録には、彼らが少しずつ子どもたちの中に入っていき、子どもたちとの関わりが深まってゆく様子が生き生きと描かれている。「キャッチボールをしているB君はとても楽しそうだった。今まで、話しかけてもあまり笑ってくれなかったのに、笑ってくれた。また、B君から話しかけてきてくれた。」「子どもに遊びを『教えてもらう』』ということを実行する。そうすると、塗り絵をしている時より話が弾み、C子ちゃんはとても楽しそうに教えてくれた。」

この病棟に来て、学生たちは生まれて初めて、いのちの危険に脅かされている子どもたちに出会う。一度学生も参加させていただいた病棟の多職種カンファレンスでは、スタッフ間で真剣な議論が交わされるのを聞いた。担当看護師や医師、院内学級の教員たちが、子どもの病状や生活について、ときには涙を流しながら、熱心に議論するのを目の当たりにした。「私自身も泣きそうになるのを何度となく、ぐっとこらえていた。」「けれど、何も知らない私が泣くなんてバカなんじゃないか、私が泣いてもいいものか、失礼にあたるんじゃないかとずっと涙をこらえていた。本当はずっと泣きたかった。」「(話し合いが)残念ながら亡くなってしまった子どもの話に移ると、みんなが泣き出した。いつも笑っているやさしい笑顔のA先生(保育士)の涙、いつもきびきび働いている看護師さんの涙は忘れられない。本当に深く関わっていること、ここの職員もみんな同じ人間であることを思い知らされたような感じだった。そんな当たり前のことを今まで知らずにいたのかと恥ずかしく思った。」「あそこにいた誰もが真剣に誰かのことを考え、事実に向き合おうとしていたと思った。」

そして、「ボランティアとして私たちに何ができるだろうか。なにもできない。でも、見守ることはできる。」と言った学生もいた。彼女はこう続けている「ボランティアをするにあたって、(私は)『何もできない』』ということを前提にすると、『～してあげる』』という(上から目線の)意識が弱くなります。それはいい意味であって、人間関係を築くという点ですごく大切な要素であると思います。」

この活動に参加した学生たちの多くは、初めは「病気の子どもたちを助けたい」という素朴な善意の気持ちで参加する。しかし彼らは、慣れない環境での緊張と不安のなかで、「病気の子どもを前にして上手に動けない自分の未熟さ」「病気で苦しんでいる子どもたちに対してなにもできない自分の無力さ」に動揺する。そして最初「子どもたちに手を差し伸べたい」と漠然と考えていたときには気付かなかった、現実には何もできない無力で不完全な自分の姿に気づき心を痛める。自分たちは何かが出来ると思っていたことは、実は全くの思い上がりだったのではないか、むしろ自分たちの活動は病院スタッフや子どもたちが寛大に自分たちを受け入れてくれるからこそ成り立っているものなのだ、というある意味では苦い気づき。苦しんでい

子どもたちと「共に苦しむ」ことなど到底できない、ましてや「役に立つ」ことなどできない自分たちの無力な姿に打ちのめされ、ボランティアとしてのアイデンティティ危機を経験する。自分たちがそれまで持っていた考え方の枠組みが揺り動かされ、苦しむ体験である。しかし振り返ってみると、この一見否定的な変化こそが、学生たちが自分の心を開き、子どもたちに出会ってゆく重要な契機となったように思われる。

人を助けるどころか、実はむしろ、自分たちこそが子どもたちの笑顔に支えられていることに気づき、仲間たちと話し合い助け合うなかで、次第に学生たちの気持ちが変化してゆく。そして、「何かをする」ことによって人を助けようとするなどできない。「ただ誰かのそばにいる」ことによって誰かを支えようとする新しい人間関係のありかたを模索する学生も出てくる。前述のノーエンは、人が本当の安らぎや慰めを感じる時は、「だれかがただいっしょにいてくれることだ」(ノーエン他, 1994, p.20)と言う。

わたしたちは、よく言います。「なぜこの人を訪ねなければならないのか。わたしは何もしてあげられないのに、何ひとつ話もできないのに。それで、わたしが何の役に立つの」と。ところが、わたしたちが慰めや安らぎを感じるのは、往々にしてお互いにとって「役に立たず」、控え目で、つつましくそこにいることなのだということを忘れていきます(同上)。

イエスは、自分の周りにある民族・宗教・価値観などの「境界」を越えて、また、自分が日頃持っている安全な「枠組」を超えて、となり人に出会っていきなさいと教えた。神と等しい者でありながら自分を無にして人々の苦しみのなかに降りてこられた(フィリピの信徒への手紙 2章6-7a節)イエスの姿について、ノウエン(ノーエン)は、イエスの生活と使命全体が「無力化の受容と、この無力さのなかで限りない神の愛を啓示すること」(ノーエン他, 1994, p.44)を意味すると言う。イエスの言う「憐れみ深い者」にわずかでも近づくには、自分の周りに築いている壁から一歩踏み出すことが必要とされる。そしてその時に私たちは、自分の恐れや傷つきやすさ、弱さと向き合い、自分の無力さと限界性を痛切に自覚させられる。自分が揺り動かされ苦しむ体験をするのだが、実はそれこそが新しい人間関係への第一歩になるのではないだろうか。

IV. おわりに

本稿では、新約聖書のなかの「憐れみ深い」という表現についてパーカー・パーマーやヘンリー・ノウエンの言葉を参照し、生涯をハンセン病の看護に捧げた井深八重の生涯を解く鍵を「ちむぐりさ」という言葉にみる試みを紹介しながら、筆者が学生たちと行ってきた病院ボランティア教育プログラムの宗教教育としての可能性について考察した。

本稿で紹介した病院ボランティア活動のプログラムにおいて大切な点は、学生たちが、自分がそれまでもっていた枠組みから一歩踏み出し、自分の無力さの自覚に苦しみながらも、隣人とのまた神との出会いを模索できる場所を提供することではないだろうか。ノウエンによれば

イエスはそのような生き方を人々に教えようとしたし、井深八重の生涯から筆者が学んだのも、苦しみのなかで人と神と出会ってゆく生き方であったといえる。その際、教員自身も、自らの無力さや限界性、恐れを自覚し、それにもかかわらずそのような私に注がれている神の愛をどのように理解し学生たちに伝えてゆかが問われていることは、言うまでもない。

本稿は、2017年10月6日(金)に東京・新丸の内ビル5階京都アカデミア・フォーラム事務局会議室にて開催された「京都アカデミアウィーク2017『思いやりの心を育てる—京都の女子大学における宗教教育—』」での筆者の口頭発表「となり人と共に」を大幅に加筆修正、論文として構成したものである。

参考文献

- 阿部志郎(1996)「同志社人物誌 井深八重」『同志社時報』101号 同志社
- 阿部志郎(2004)「井深八重」同志社大学社会福祉学会(編)『社会福祉の先駆者たち』筒井書房 pp.62-68
- 荒井献(2009)『イエス・キリストの言葉—福音書のメッセージを読み解く』岩波書店
- 新井利佳(2006)「井深八重—ハンセン病患者への無私の奉仕」室田保夫(編著)『人物で読む近代日 本社会福祉のあゆみ』ミネルヴァ書房 pp.199-205
- 井深八重(1975)「同志社大学名誉学位をいただき」同志社女子大学学報『しばくさ』第14号
- 井深八重(1978)「信仰による“愛の御業”につれづれの(わたしのなかの歴史)」『月刊福祉』61(5)pp.76-81
- 井深八重(1979)「道を来て」「人間の碑」刊行会(編)『人間の碑—井深八重への誘い』井深八重顕彰記念会 pp.29-56
- 井深八重(1982)「同志社女子部での思い出」同志社女子大学学報『しばくさ』第21号
- 菊地順(2008)「井深八重とその信仰」『キリスト教と諸学』Vol.23, pp.262-294
- 小崎真(2014)「眼に見えない賜物—井深八重に誘われ」『同志社女子大学ホームカミングデー2014 講演会』同志社女子大学
- 才藤千津子・中村信博・小崎真・藤原翔子(2012)「小児病棟における学生ボランティアの活動から—全人的人間理解の可能性」『同志社女子大学総合文化研究所紀要 第29巻』pp.50-69
- 才藤千津子(2014)「小児がん患児とご家族のためのサポート活動「ぶどうの会」と絵本・パンフレット作成活動報告 同志社女子大学現代社会学部『現代社会フォーラム』第10号 pp.13-20
- 辻学(2010)『隣人愛のはじまり—聖書学的考察』新教出版社
- バーマー, P・J(2008)『教育のスピリチュアリティ—知ること・愛すること』日本キリスト教団出版局
- 中村剛(2009)『井深八重の生涯に学ぶ—“ほんとうの幸福”とは何か』あいり出版
- 「人間の碑」刊行会(2002)『人間の碑—井深八重への誘い』井深八重顕彰記念会
- ノーエン, H., マックネイル, D. & モリソン, D. (1994)『コンパッション—ゆり動かす愛』石井健吾(訳)女子パウロ会
- 平山正実・堀肇(編著)(2014)『ヘンリ・ナウエンに学ぶ—共苦と希望』聖学院大学出版会
- 星倭文子(2013)『会津が生んだ聖母 井深八重—ハンセン病患者に生涯を捧げた—』歴史春秋社

Keywords : 宗教教育, 病院ボランティア, 井深八重, キリスト教教育, 「憐れみ深い」